

源氏物語における敬語の例外的取捨と語り手

(その二)

山 本 ト シ*

前稿¹⁾では、源氏物語第一部(桐壺～藤裏葉)の地の文における敬語の例外的取捨について報告し、この物語の表現方法についての考察を述べた。本稿では、第二部の地の文における敬語の例外的取捨について報告する。はじめに前稿にならって敬語の使用状況を調査する際の方針を記しておく。

1. 調査の対象は若菜上巻～幻巻の地の文とする。
2. テキストは角川文庫(内・外)を使用する。
3. 例外の基準は、玉上氏の示された「地の文で敬語の付きうるのは、皇族と上達部の列以上であり、特別の君達これに準じ、女性もほぼ同じい。」²⁾という原則に大体依った。いわゆる謙譲語については、松尾聡氏の説³⁾に従い、動作の受手に対する話者の尊敬を表すと考えた。従って「(帝ガ源氏ヲ)入れ奉り給ふ」の「奉り」などは例外と考えない。
4. 一文中の一つの敬語で敬意を代表させたと考えられる場合、その文中の他の語が無敬語でも、例外と考えない。
5. 会話や心内語をくくる括弧を私見により補ったり位置を改めたりした場合がある。又、心内語の末尾が地の文に流れている場合、心内語と見なせる部分は地の文としては扱わなかった。

本論に入る前に、調査の結果の概略を述べておく。

地の文の敬語が例外的に取捨される原因として、第一部とほぼ同様に、次のようなことが挙げられる。

- a 語り手が作中人物と一体化して語る表現による場合。40個所余りある。
- b 語り手が作中人物の心を、説明、批評する場合。9個所ほど。
- c 「思ふ」「言ふ」「書く」などの動詞や、心情形容詞によって受けとめられる文脈の場合。30個所弱。
- d 作中人物に対する語り手の評価による場合。8個所ほど。
- e 作中人物間の身分差による場合。10余個所。
- f 慣用による場合。10個所ほど。
- g 不明。10個所ほど。

猶、明石尼君は敬語の揺れが大きく、その原因がはっきり掴めなかったので、上の数値には入れてない。

二

a 一体化表現

源氏物語の地の文には、語り手が作中人物と一体化して語っていると思われる表現がよく見られる。敬語が例外的に取捨される原因として最も大きいのは、この表現によるものである。この表現について、前稿を補足しつつ、説明していきたい。

語り手が作中人物と一体化しているが如き表現とは、例えば、次のようなものである。(漢数字は角川文庫の巻数、算用数字は頁数。下線は敬語が例外的に取捨されている語。)

- ふくろふはこれにやとおぼゆ。うち思ひめぐらすに、こなたかなたけどほくうとましきに、人声はせず。(夕顔一130)
- いとわりなくて見奉る程さへ、うつつとは覚えぬぞわびしきや。(若紫一173)
- 手をさし入れてさぐり給へれば、なよよかなる御衣に髪はつやつやとかかりて、末のふさやかに探りつけられたる程、いとうつくしう思ひやらる。(若紫一182)
- ふり捨てむこと、いとかたし。(賢木二155)

これらは、作中人物の心情や、感覚が捉えたことを、そのまま地の文に写しとった感がある。このような表現を島津久基は、夙に「主観直叙」と呼んだ⁴⁾。[西尾光雄氏は、独語 erlebte Rede の訳語である「体験話法」という語を用いられた⁵⁾。これは、語り手が作中人物の心情や感覚を、その人物になりかわって体験しているかのようにならうと、その人物の心から付けられた名称であろう。前稿では西尾氏に倣い「体験話法」の語を使ったのだがこの語はあまり一般化していない。最近、上記のような地の文を、「語り手が作中人物に一体化している」「融合している」「感情移入している」などとする研究者が多い。中では「一体化」という語が最も広く使われていると思うので、本稿では、「体験話法」に替えて、「一体化表現」という語を使うことにしたい。猶、上野英二氏が指摘された⁶⁾、現代語には決してなく、源氏物語にはしばしば見られる、形容詞終止形が第三者の感情を表す文——例

* 国文学研究室

えば「見奉る人々もいと悲し」のような——も、一体化表現の一つの型である。

一体化表現では、叙述の視点が作中人物に置かれる。従って敬語の使用もその人物を基準としたものになり、例外的に除去、又は付加される場合が生ずるのである。

さて、上記四例のような典型的な一体化表現の他に、作中人物の秘かな思惟、動作、状態などを叙述する部分でも、敬語が除去されることがよくある。例えば、

- 「さても、いとうつくしかりつるちごかな。なに人ならむ。かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや」と思ふ心、深うつきぬ。(若紫一158)

又、野分巻で夕霧は紫上、玉鬘、明石姫君の姿を垣間見る。御簾の内部は夕霧の視点に立つ典型的な一体化表現で描かれるが、その前後の、夕霧の秘かな思惟、動作、状態も無敬語で述べられる。例を紫上の垣間見にとると、

- ……いたり深き御心にて、もしかかるともやと思すなりけり、と思ふに、気配恐うて立ち去るにぞ、西の御方より、内の障子ひきあけて渡り給ふ。……また寄りて見れば、物聞えて大臣もほほえみて見奉り給ふ。親とも覺えず、若く清げになまめきていみじき御かたちの盛りなり。女もねびととのひ、あかぬ事なき御様どもなるを身にしむばかり覺ゆれど、この渡殿の格子も吹き放ちて立てる所のあらはになれば、恐うて立ちのきぬ。今参れるやうにうち声づくりにて簀子の方に歩み出で給へれば(野分五62)

の如く、「思ふ」「立ち去る」「寄りて見る」「覺ゆ」「立ちのく」などという、他の作中人物の知り得ぬ、夕霧の秘かな思惟、動作、状態には敬語がついていない。そして夕霧が人前に姿を現すと「歩み出で給へれば」と敬語が付く、このあと一人になって垣間見の衝撃を反芻するところでは、再び敬語が付かないのである。

このような、その人物しか知り得ぬ秘かな思惟、動作、状態が無敬語で述べられる部分も、よく「語り手が作中人物に同化している」「密着している」などと言われる。このような部分は、典型的な一体化表現と相い接する個所にあることが多く、又、「覺ゆ」などの語は双方に使われることから、私は、思惟、動作、状態が無敬語で述べられる部分は、一体化表現の一種だと考える。同じ考えに立つ先学として、前稿では玉上琢弥氏、根来司氏の名を挙げたが、最近石田譲二氏も

心のみならず、状態や動作についても敬語を使わぬ場合がある。その心の動きにせよ動作にせよ、当人に密着した書き方で、効果としては、なまなましい効果がある。一括して(人物の心情に密着した書き方のところと一括して、の意。山本注)考えるべきであろう。

と述べておられる⁷⁾。

このような、典型的な、或いは広義の一体化表現は、第一部の物語の要所々々に使われ、人物の心理や感覚の迫真性や、臨場感を伝えるのに高い効果を挙げていた。一体化表現の語り手は、高い身分の人物にも同化してその心情を述べたり、誰も知り得ぬ秘かな動作を述べたり、又急にその人物から離れて語り手自身の意見を述べたり、作中人物が衆人環視の行動に移ると敬語付きに変えたり、という、誠に自在な語り方をしている。従ってこの語り手は、玉上氏が提唱され⁸⁾、帯木冒頭部の「まだ中將にもの給ひし時は」などの草子地でその存在が知られる側近女房とは異なる、もっと自由に抽象的な、「作者に近い語り手」なのではないかと想像されるのである。

では次に、第二部について、上に説明したような一体化表現のために敬語が取捨されていると思われる例を検討する。まず夕霧の場合。

女三宮の婿選びに腐心する朱雀院のもとに夕霧が参上する。そこに次の文がある。

- 二十にもまだわづかなる程なれど、いとよく整ひすぐして、かたちも盛りににほひて、いみじく清らなるを、御目にとどめて、うらまらせ給ひつつ、このもてわづらはせ給ふ姫宮の御後見に、「これをや」など、人知れず思し寄りけり。(若菜上六20)

夕霧はこの時中納言であり、第一部以来敬語が付くのが普通だが、ここでは付いていない。それは、上の文中に「御目にとどめて」とある通り、朱雀院の目に映った夕霧だからであり、敬語使用の基準が朱雀院に置かれているためであろう。「二十にも清らなる」は、語り手が朱雀院の立場に同化して叙述している一体化表現であると言ってよいだろう。続いて次の文がある。

- 「太政大臣のわたりに、今は住みつかれにたりとな。年ごろ心えぬさまに聞きしが、いとほしかりしを、耳安きものから、さすがに妬く思ふ事こそあれ」と宣はする御けしきを、いかに宣はするにか、と、あやしく、思ひめぐらすに、「この姫宮をかく思ひ扱ひて、さるべき人あらばあづけて、心安く世をも思ひ離ればや、となむ思し宣はする」と、おのづから漏り聞き給ふ便ありければ、さやうの筋にやとは思ひぬれど、ふと心え顔にも何かは答へ聞えさせむ。(若菜六20)

上の文で一個所「漏り聞き給ふ」と敬語が付くが、夕霧の心の中は「思ひめぐらすに」「思ひぬれど」と無敬語で述べられ、最後は心内語のような形で終わっている。思惟を表す二語が無敬語なのは、前述の野分巻と同様、夕霧に密着してその秘かな心を語る広義の一体化表現ゆ

えと見てよいだろう。朱雀院と夕霧が口から出す言葉はおのおのの心とは、ずれているわけだが、その心が一体化表現で語られることにより、読者は、言葉とは喰い違う心の真実性を深く味わうことになるのではなからうか。

降嫁後、女三宮の幼さに気付き、

○ 「……人目の飾りばかりにこそ」と見奉り知る。

(若菜上六99)

と推測するところも無敬語である。夕霧の秘かな心を述べたもので、前の「思ひめぐらす」「思ひぬれど」と同様、広義の一体化表現と考えてよいのではないか。

続いて夕霧の秘かな内面が無敬語で語られる例を見ていきたい。蹴鞠の場面では、後述するように、柏木の心理が無敬語で述べられるが、夕霧も次のような個所が無敬語となっている。

○ 猫の綱ゆるしつれば、心にもあらずうち嘆かる。

若菜上六103)

○ いと端近なりつる有様を、かつは軽々しと思ふらむかし。いでやこなたの御有様の、さはあるまじかめるものを、と思ふに、かかればこそ世の覚えの程よりはうちうちの御心ざしのぬるきやうにはありけれ、と思ひ合はせて、なほ内外の用意多からず、いはけなきはらうたきやうなれど、後めたきやうなりや、と思ひおとさる。(若菜上六104)

垣間見の後、のぼせ上がっている柏木を観察する個所も次の如く無敬語である。

○ いで、あなあぢきなのもの扱ひや、さればよ、と思ふ。(若菜上六107)

○ 「なほいと気色ことなり。わづらはしき事いでくべき世にやあらむ」と、われさへ思ひつきぬる心地す。(若菜下六111)

病床の柏木を見舞う場面でも、

○ 今日喜びとて、心地よげなましを、と思ふに、いと口惜しうかひ無し。(柏木七37)

柏木の言葉の直後、又、柏木の死後その言葉を思い出すところでも

○ 心の内に思ひあはする事どもあれど、さして確かに、えしも推し量らず。(柏木七39)

○ 大将の君は、かの今はのとちめにとどめし一言を、心ひとつに思ひいでつつ、いかなりし事ぞとは、いと聞えまほしう、御けしきもゆかしきを、ほの心えて思ひ寄らるる事もあれば、なかなかうちいでて聞えむもかたはらいたくて、いかならむついでに、この事の委しき有様もあきらめ、またかの人の思ひ入りたりしさまをも、聞しめさせむ、と思ひわたり給ふ。(横笛七62)

この横笛巻の例は、最後の「思ひわたり給ふ」で敬意が代表されているとも解せるが、「思ひいでつつ」「思ひ

寄らるる」などは夕霧の秘かな思惟であり、意図的に敬語を付けなかったと考えられる。

柏木が夕霧の夢に現れる個所では、二人とも無敬語である。

○ すこし寝入り給へる夢に、かの衛門の督、ただありしさまの桂姿にて、傍にゐて、この笛をとりて見る。夢のうちにも、なき人の、わづらはしう、この声をたづね来たと思ふに

「笛竹にふきよる風のことはならば

末の世ながきねに伝へなむ

思ふかた異に侍りき」といふを、問はむと思ふほどに、若君の寝おびれて泣き給ふ御声に、さめ給ひぬ。

最後の「さめ給ひぬ」で敬意が代表されているとも解せるが、「若君の」以下が現実の出来事であって、その前の「思ふ」は、夢の中の夕霧の思惟なので、意図的に敬語を付けなかったのだと思う。夕霧の心の中に映ずる柏木なので、柏木にも敬語が付かないのだろう。

このように、夕霧が女三宮や柏木に関して一人の思いに耽る個所では、夕霧に敬語が付かないことがよくあるのだが、赤子の薫を観察するところでも、薫は夕霧の視点によって描かれ、夕霧自身には敬語が付かない。

○ なま目とまる心も添ひて見ればにや、眠居など、これは今すこし強うかある様まさりたれど、眈のとちめをかしうかをれる気色など、いとよくおぼえ給へり。口つきの、ことさらに花やかなる様して、うち笑みたるなど、わが目のうちつけなるにやあらむ。おとどは必ず思し寄すらむと、いよいよ御気色ゆかし。……この君は、いとあてなるものから、さま異にをかしげなるを、見くらべ奉りつつ、「いであはれ。……(父大臣に)聞かせ奉らざらむ罪得がましき」など思ふも「いかで、然はあるべき事ぞ」となほ心得ず思ひ寄るかたなし。心ばへさへなつかしうあはれにて、むつれ遊び給へば、いとらうたく覚ゆ。(横笛七71)

夕霧の視点に立つ一体化表現と思われ、読者も夕霧と共に薫を観察するかのよう効果のある一節である。

以上見てきたように、女三宮、柏木、薫について、夕霧が一人の思いに耽るところでは、夕霧の思惟や動作を表す語に敬語がつかない個所を、数多く指摘することが出来る。夕霧は、柏木・女三宮事件の観察者だと言われるが、その夕霧自身しか知らない心の奥は、女三宮降嫁以前から、赤子・薫の観察まで、一貫して無敬語で述べられるのである。そのために、読者は夕霧の心の奥を直接知った気がし、夕霧の観察即ち真実と、いつしか思うようになっているのではなからうか。これらの個所がもし敬語付きで述べられていたら、この効果は半減してい

るのではないかと思う。

夕霧の、紫上に対する思慕が描かれる時も、夕霧に敬語が付かない。女三宮の幼さと比較して改めて紫上の類なさを思うところに、次の文がある。

- 見し面影も忘れ難くのみなむ思ひいでられける。
(若菜上六98)

六条院の女楽の夜、夕霧は、紫上の弾く和琴(大和琴)に特に耳をそばたてる。そこには次のような文がある。

- 大和琴にもかかる手ありけり、と聞きおどろかる。
(若菜下六136)

又、御簾内を思いやるところも敬語が無い。

- 対の上の、見し折よりも、ねびまさり給へらむ有様ゆかしきに、しづ心もなし。
(若菜下六138)

御法巻で紫上の死に顔に見入るところ、又、幻巻で紫上を思い出すところも、夕霧に敬語が付かない。

- 大将の君も涙にくれて、目も見え給はぬを、しひてしほりあけて見奉るに、なかなかあかず悲しきこと類なきに、まことに心惑ひもしめべし、御髪のただうちやられ給へる程、こちたくけうらにて、露ばかり乱れたるけしきもなう、つやつやと美しげなるさまぞ限りなき。燈のいと明きに、御色はいと白く光るやうにて、とかくうち紛らはす事ありし現の御もてなしよりも、いふかひなきさまにて何心なくて臥し給へる御ありさまの、あかぬ所なし、と言はむもさらなりや。なのめにだにあらす類なきを見奉るに、死に入る魂の、やがてこの御からにとまらなむ、と思はゆるも、わりなき事なりや。
(御法七166・167)

- おはせし世はいとけどほかりしおましのあたりのいたうも立ち離れぬなどにつけても、思ひいでるる事も多かり。
(幻七189)

このように、夕霧が紫上を思うところになると無敬語になるのだが、これは、野分巻で紫上を垣間見たり、その姿を思い出して深い思いに沈む個所では夕霧に敬語が付かなかったことと、全く同様な現象である。第二部の例も、語り手が夕霧に密着して、その秘かな心を述べたものと見てよいのではなかろうか。

女二宮関係の記事でも夕霧に敬語が付かないことがある。

- 所がら、よろづのこと心細う見なさるも、あはれに物思ひつづけらる。
(夕霧七94)

上の文は、山荘周辺の霧囲気に浸り切っている夕霧の心情を表している。又、

- ほのかに聞ゆる御けはひに、慰めつつ、まことに帰るさ忘れはてぬ。
(夕霧七94)

は、女三宮の声とけはひに我を忘れる夕霧の状態を語っている。二例とも、夕霧に密着してその内面を無敬語で

語る手法と見てよいのではなかろうか。

次の文も、夕霧の視点に立って一条宮邸の様子を述べたものであろう。

- ……一条の宮は道なりけり。いとどうちあばれて、ひつじさるのかたのくづれたるを見入るれば、はるばるとおろしこめて、人影も見えず。
(夕霧七128)

以上、夕霧の敬語が例外的に除去される諸例を

- 女三宮・柏木事件に関する思惟、観察
- 紫上への思慕
- 女二宮邸の様子、又、女二宮への恋慕

という三つの内容に大別して見てきた。これらの諸例は夕霧が観察する事柄を、彼の見のままに地の文に描いたり、夕霧自身しか知り得ぬ深い思惟や秘かな状態を語ったりしている。これは第一部に見られたのと同じく、語り手が夕霧に密着、或いは一体化して述べる手法、即ち一体化表現であり、敬語使用の基準が夕霧に置かれているため、夕霧に敬語が付かないのではないかと思う。

次に源氏と紫上の場合について述べる。

若菜下巻の女楽の夜、女三宮、明石女御、紫上、明石の御方の四人が、それぞれに相応しい花に例えて美しく描写される。その部分は「(源氏が) 宮の御方をのぞき給へれば」で始まり、四人の女性は、次々に彼女達を覗いたであろう源氏の視点で描かれていると思われる。

- ただ御衣のみあるここちす。
(若菜下六136)
- 五月まつ花橘、花も実も具しておし折れるかをり覚ゆ。
(若菜下六138)

の二語が無敬語となっている。明石御方に敬語が付かないのは、源氏の心内における、四人の女性の中の御方の位置付けを表しているのだろう。

第二部終末の御法巻、幻巻には、死にゆく紫上、或いは故人となった紫上を慕い、悲しむ源氏の心をそのまま地の文に写し取った表現、即ち一体化表現がしばしば見られ、そこでは源氏に敬語が付かない。

- 心になはぬ事なれば、かけとめむ方なきぞ悲しかりける。
(御法七164)
- むかし大将の御母君うせ給へりし時の暁を思ひ出づるにも、かれはなほ物の覚えけるにや、月の顔の明らかに覚えしを、こよひはただ昏れ惑ひ給へり。
(御法七168)
- 胸のせきあぐるぞたへ難かりける。
(御法七168)
- はかなくてつもりにけるも、夢の心地のみす。
(御法七173)
- まづその折かの折、かどかどしうらうらうじう、にほひ多かりし心ざま、もてなし、言の葉のみ、思ひ続けられ給ふに例の涙もろさは、ふとこぼれ出でぬるもいと苦し。
(幻七182)

- ゆくすゑ長きことを請ひねがふも、ほとけの聞き給はむことかたはらいたし。(幻七194)

上の文のうち、第二の例は「覚えしを」あたりまで、第五の例は「例の涙もろさは」以下を、源氏の心を直接地の文にした、一体化表現ととってよいのではないか。

第一部では、源氏が藤壺及びそのゆかりである少女期の紫上を思うところに、よく一体化表現が使われた。

- さるは、限りなう心をつくし聞ゆる人にいとよう似奉れるがまもらるなりけり、と思ふにも、涙ぞ落つる。(若菜一157)
- 「……かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや」と思ふ心、深うつきね。(若菜一158)
- ゆかりいと睦ましきに、いかでか、と深うおぼゆ。(若菜一171)

などである。第二部で源氏に関して一体化表現が使われるのは、他には女楽の夜の記事だけであり、密通事件で様々に苦慮するところなどでも、源氏の心が一体化表現で語られることはない。それが、正編の終末に位置する御法・幻の二巻において、第一部における少女期の紫上思慕と呼応するかのように、一体化表現が使われるのである。

紫上の場合、女三宮降嫁の際の物思いに、部分的ではあるが、一体化表現が見られると思う。

- げに、かかるにつけて、こよなく人に劣り消たる事もあるまじけれど、また並ぶ人なくならひ給ひて……(若菜上六47)

「あるまじけれど」あたりまでは、紫上の心をそのまま地の文にした、一体化表現ではないか。

- 年ごろさもならひ給はぬここに、忍ぶれど、なほものあはれなり。(若菜上六48)

「忍ぶれど」以下が一体化表現ではないか。

- げにかたはら寂しきよなよな経にけるも、なほただならぬ心地すれど、かの須磨の御別れの折りなどを思し出づれば……(若菜上六50)

「ける」は紫上自身の気付きを表し、「心地すれど」あたりまでが一体化表現ではなからうか。

ここで、第二部において最も敬語の揺れが大きい柏木について、敬語の有無の使い分けを見ておきたい。柏木に対する敬語の使い方は複雑であるが、ごく大掴みに言うと、夕霧などの場合と同じ使い分け——秘かな心情や行動を述べる個所では無敬語。人前での、社会的地位に相応しい行動の時は敬語がつく、という——が見られると思う。

柏木は、若菜上巻の初めから若菜下巻の半ばまでは、宰相兼右衛門督、位は正四位か従三位ほどの可能性が強い⁹⁾。玉上氏の言われる原則に照らしてみると、宰相と

いう点から見れば敬語が付き、四位だとすると付かないという、不安定な地位にいるわけである。

第二部で柏木が初めて本格的に紹介されるのは、次の文である。

- 衛門の督の君も、院に常に参り、したしく候ひ慣れ給ひし人なれば、この宮を父帝のかしづきあがめ奉り給ひし御心掟など、詳しく見奉り置きて、さまざまの御定めありし頃ほひより聞え寄り、院にもめざましとは思し宣はせずと聞きしを、かくことざまになり給へるは、いと口惜しく胸痛き心地すれば、なほえ思ひ離れず。その折りより語らひつきにける女房のたよりに、御有様なども聞き伝ふるを、慰めに思ふぞはかなかりける。「対の上の御気配には、なほおされ給ひてなむ」と世人もまねび伝ふるを聞きては、「かたじけなくとも、さるものは思はせ奉らざらまし。げに類なき御身にこそあたらざらめ」と、常にこの小侍従といふ御乳主をも、言ひ励まして、「世の中定めなきを、大殿の君もとより、本意ありて思し掟てたる方におもむき給はば」と、たゆみなく思ひありきけり。(若菜上六99)

森一郎氏は、「この宮を～思いありきけり」の柏木に対する無敬語は、「柏木の心情に非常に濃く染め上げられている語りの文体ゆえ」であり、「語り手は消えて、あたかも柏木が語り手であるかのような地の文」であるとされる¹⁰⁾。確かにここは柏木の奥深い心が無敬語で描かれて、特殊な効果を挙げているが、「柏木が語り手であるかのような地の文」、即ち一体化表現は、私は、「この宮を～え思ひ離れず」あたりまでではないかと思う。なぜなら、そのあとの「語らひつきにける」の「ける」、「思ひありけり」の「けり」には、語り手の存在が感じられるからである。とすると、この引用文の前半は柏木の立場で語られた一体化表現であり、後半は語り手の立場で語られた説明ということになる。森氏は「なぐさめに思ふぞはかなかりける」も柏木の心情と解されるが、このあたりを語り手の語りだとすると、小学館全集本の注に言うとおりの、「語り手の評」¹¹⁾ということになる。この文の他にも、柏木の恋の経過が語られる時に、敬語が付かず、しかも語り手の存在が明瞭に示されている、という個所がいくつかある。これらは一体化表現と同じく心の内奥が語られているものの、語り手の存在が明らかなので、一体化表現というわけにはいかない。このような語り方は他にもあり、次のb項で詳しく見ることにする。

蹴鞠の場面では、

- 衛門の督のかりそめに立ちまじり給へる足もとに、並ぶ人なかりけり。かたちいと清げに、なまめきたる様したる人の、用意いたくして、さすがに乱

りがはしき、をかしく見ゆ。(若菜上六101)

柏木の蹴鞠の技が抜きんでていることを言っているわけだが、「立ちまじり給へる足もと」と敬語がつけられることによって、柏木の足もとにスポットライトが当てられる感があり、次の場面の中心人物であることを予想させる効果を持っている。後半に敬語がないのは、続いて「おとども宮も、隅の高欄に出でて御覧ず」とある如く、源氏や萤宮から見た柏木だからであろうか。

- 督の君続きて「花みだりがはしく散るめりや。桜は避きてこそ」など宣ひつつ(若菜上六102)

と敬語が付くのは、御簾内を意識して、古歌を引いて気取った物言いをする、それは周囲の人々にも聞えるのである。衆人環視の行動であるから敬語が付くのであろう。

御簾の隙間から見える女三宮の立ち姿は、柏木の視点から描かれ、この間、柏木には次の如く、全く敬語が付かない。

- 宮の御前のかたをしり目に見れば……春の手向の幣袋にやと覚ゆ。……耳かしがましき心地す。……まぎれ所もなくあらはに見入れらる。……奥暗き心地するも、いと飽かず口惜し。(若菜上六102)

新婚の源氏の眼には「げにいと小さくかたなり」と映った人が、今は、完璧なまでに美しく描かれ、同じ小柄であることが「御衣の裾がちに、いと細くささやか」と表現される。御簾が開いていたのは、ほんの短い間だったろうが、宮の美しさは余すところなく描かれている。これも、柏木が(同時に夕霧も)ほんの短い時間にこれだけたくさんものを見てとったからであろう。

このあと、垣間見の衝撃を反芻するところ、その衝撃を胸に夕霧と語る所に、ずっと敬語が付かない。

- ましてさばかり心をしめたる衛門督は、胸ふとふたがりて……心にかかりて覚ゆ。(若菜上六104)
- わりなき心地の慰めに、猫を招き寄せてかき抱きたれば、いとかうばしくて、らうたげにうち鳴くも、なつかしく思ひよそへらるるぞ、好々しや。(同)
- 衛門督は、いといたく思ひしめりて、ややもすれば、花の木に目をつけてながめやる。(同)
- 宰相の君は、よろづの罪をもをさをさたどられずおほえぬ物のひまより、ほのかにそれと見奉りつるにも、わが昔よりの心ざしのしるしあるべきにや、と契り嬉しき心地して、あかずのみ覚ゆ。(若菜上六105)
- (源氏の)御さまの、にほひやかに清らなるを見奉るにも……思ひめぐらすに、いどこよなく、御あたりはるかなるべき身の程も思ひ知らるれば(若菜上六105)

いずれも柏木の秘かな心中、秘かな動作を述べたものである。第二の例の「好々しや」という語句は、諸注、語り手の評と解するが、この文を語り手と作中人物が一体化したものと解すると、柏木自身の反省、自嘲ともとれるわけである。一体化表現には自発の助動詞がよく使われることを考えると、ここは柏木の反省、自嘲と解したい。この間、

- 申し給へば(若菜上六105)
- まかりで給ひぬ。(若菜上六106)

と二個所に敬語が付くのは、宰相であり、太政大臣家の長男である人として、源氏と応答し、六条院を退出したからではないか。柏木の応答は立派であり、又退出というのは秘かな行動ではなく、地位に応ずる作法も伴っていたらと思う。

帰途、夕霧と語る柏木の言葉は、内心を押さえられず、いかにも愚かである。それを承ける動詞は、次の如く無敬語である。

- ……とあいなく言へば……いとほしがる。……と口ずさびに言へば(若菜上六106)

この場面の柏木は、宰相としてではなく、恋に心を奪われた一人の男として描かれている。そのような語り手の評価のために、敬語が付けられないのではなかろうか。

東宮に参上する場面では、「参り給ひて」「啓し給へば」「聞えなし給ふ」「教へ聞え給ふ」「見つけ給へり」と、ほぼ敬語がつく。蹴鞠の場面の後、夕霧に対して話す時には「言へば」とあり、東宮に話す時には「給ふ」がつく、という一見矛盾した現象は、蹴鞠の場面と東宮御所における柏木の存在が全く違ったものとして描かれていることを示すのだろう。東宮御所には、伺候する女房たちがいるであろう。そういう中で柏木は宰相として振舞い、東宮に対座しているのであろう。柏木の官職から言えば、敬語が付いて不思議はないのである。蹴鞠のあとの宴会で、源氏に話す時、「申し給へば」と敬語が付くのも同じであろう。

東宮から猫をもらいうけて、自邸で異常に愛玩するところでも敬語が付く。これは、家の女房たちの視線の中での行動であるからだろう。その女房たちは、

- 御達などは、「あやしくにはかなる猫のとときめくかな。かやうなるもの見入れ給はぬ御心に」と、とがめけり。(若菜下六114)

というところで、はっきり姿を現す。

東宮御所や父大臣邸であっても、一人の秘かな思いや行動の時には、次の如く敬語が付かない。

- 論なう(東宮が女三宮に)通ひ給へる所あらむかし、と目とどめて見奉るに(若菜下六112)
- (猫が)いとをかしげにてありくを見るに、まづ思ひ出でらるれば(若菜下六112)

- (猫を) いとらうたく覚えて、かき撫でてるたり。(若菜上六113)
- 心の中に、あながちにをこがましう、かつは覚ゆ。(若菜上六113)
- 来て、「ねうねう」といとらうたげに鳴けば、かき撫でて「うたてもすすむかな」とほほゑまる。

(若菜上六114)

次に柏木が登場するのは、物語の四年間の空白のあとで、彼は中納言になっている。三位にも勿論なっていると思われる。

彼の父の若い頃を調べてみると、

頭中将時代(帶木～花宴卷)	敬語なしが原則
三位中将時代(葵卷)	敬語あり
〃 (賢木卷)	敬語なし
宰相中将時代(須磨卷)	敬語あり
中納言時代(濡標卷)	敬語あり

というように、三位中将時代はまだ敬語が付かないこともあるが、宰相中将以降は付くようになる。これから考えても、玉上氏の示された原則¹³⁾からしても、中納言になった柏木には敬語が付いてよい筈なのであるが、依然として敬語なしの場合が多い。小侍従と話す柏木に敬語が付くのは、相手が女房だからである。

密会の場面、即ち小侍従の導きで御帳の端に据えられてから、女三宮の「あけぐれに」の歌に魂を残しながら出て行くまで、柏木に敬語が付くのは

- よろずに聞え給ふ。(若菜下六160)

の一語だけで、他は角川文庫4ページにわたって、心も行動も無敬語で描かれる。武原弘氏は、この場面の無敬語の原因として、

- ・ 柏木の切迫した心理、行動を効果的に叙するため
- ・ 女三宮と比した柏木の身分、地位の低さを強調するため
- ・ 柏木に対する作者の倫理的批判意識のため

の三つを挙げられ、最終的には、「場面の頂点においてその作中世界の緊迫感をより効果的に表すために敬語を省略し」たとされる¹³⁾。ほぼ妥当な意見と思うが、今までも、又これからも見る通り、女三宮への秘かな思いやそれに基く行動を叙述する時に柏木に敬語が付かないのは、柏木の登場する場面全体に見られる原則であり、密会の場面に限るわけではない。しかしともかく、密会の場面は、若菜下巻の物語の頂点の一つと言ってよく、ここで柏木に敬語が付かないことは、彼の秘かな心情や行動を直接読者に伝え、生々しい臨場感を醸すのに役立っているだろう。中には、

- 物におそはるかと、せめて見上げ給へれば、あらぬ人なりけり。あやしく聞きも知らぬ事どもをぞ聞ゆるや。(若菜下六159)

- なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見え給ふ御けはひの、あてにいみじく覚ゆることぞ、人に似させ給はざりける。(若菜下六160)

のように、女三宮や柏木の心情をそのまま写し取った地の文、即ち典型的な一体化表現がある。「けり」「や」「ける」は、女三宮や柏木の詠嘆や気付きをそのまま表しているのだろう。

密会后では、

- 女宮の御もとにももうで給はで、大殿へぞ忍びておはしぬる。(若菜下六163)
- ありきなどもし給はず。(同)
- 衛門督、……今日は御弟ども、左大弁、藤宰相など、奥の方にのせて(賀茂祭を)見給ひけり。(若菜下六171)

と、女二宮、父大臣、兄弟と共に叙述される文や、外出などの人目の中での行動の時には敬語がつき、その他の、一人煩悶する多くの記事では付かない。

- かの君はまして、なかなかなるこちのみまさりて、おきふし明かし暮らしわび給ふ。祭の日などは、物見にあらそひ行く君達かきつれ来て、言ひそそのかせど、なやましげにものなして、ながめふし給へり。女宮をば、かしこまりおきたるさまにものなして聞えて、をさをさうちとけても見え奉り給はず、わが方に離れるて、いとつれづれに心細くながめ給へるに、童の持たる葵を見給ひて、くやしくぞつみをかしけるあふひ草

神のゆるせるかざしならぬに

と思ふもいとかなかななり。世のなか静かならぬ車の音などを、よそのことに聞きて、人やりならぬつれづれに、暮らしがたく覚ゆ。(若菜165)

は、独詠歌を境に、周囲の人から見られる行為と、秘かな思いを、対照させたものであろうか。

試案の場面で概ね敬語が付かないのは、源氏と柏木の地位の差を強調するためだろう。源氏の前を去ると敬語が付くし、又、源氏と対座している所でも「いとどしづめて候ひ給ふさま」「申し給へば」と敬語が付くのは、官位に相応しい態度を描いているからだろう。

試案の席から柏木は父大臣邸に退出し、病床に臥す身となる。ここから死ぬまで、敬語が付くのが普通になる。つまり、柏木に敬語が恒常的に付くようになる転換点は、官位の昇進などではなく、病床に就くことなのである。それは、以後の柏木は、女三宮への恋に一人煩悶する姿より、太政大臣家の長男として、将来を嘱望された中納言として、多勢の人目の中での姿が描かれるからであろう。しかしその中であっても、心の中が述べられる時には敬語が付かない、という今まで見てきた原則は、次の如く貫かれている。

- いと一言ふばかり、おくすべき心よわさとは覚えぬを、いふかひなくもありけるかな、と、みづから思ひ知らる。(若菜下六200)
- 今はと別れ奉るべき門出にやと思ふは、あはれに悲しく、おくれて思し嘆かむ事のかたじけなきを、いみじと思ふ。(同)
- ……など、つれづれに思ひつづくるも、うちかへしいとおぢきなし。(柏木七20)
- ……とばかり(女三宮の文に)あゝるを、あはれに、かたじけなしと思ふ。(柏木七24)

以上、若菜上巻から柏木巻にかけての柏木の敬語について見てきた。柏木は敬語の揺れが大きい人物であるだけに、敬語が例外的に取捨される理由を探るための好材料になり得ると思われる。柏木に敬語が付くのは、主に次のような場合である。

1. 父大臣邸における行動
2. 女二宮に対する行動
3. 東宮御所での行動
4. 朱雀院に仕える、源氏と話す、等の行動

これらは皆、柏木が太政大臣家の長男として、或いは宰相、次に中納言として周囲から見られ、自身でも振舞っている場面である。一方、柏木に敬語が付かないのは、主に次のような場合である。

1. 女三宮の垣間見
2. 女三宮への秘かな思慕とそのために煩悶する心中
3. 思慕や煩悶を胸に秘かな動作
4. 思慕や煩悶についての語り手の説明
5. 身分高き人と共に居る時

1は典型的な一体化表現。2も第一部に広く見られた、作中人物の心に密着して、その思惟を無敬語で述べる、広義の一体化表現であろう。3は密会の場面の動作などで、1、2より客観描写的な色合いが濃い、野分巻の夕霧の「見る」「立ち去る」などと同じく、やはり広義の一体化表現と見てよいのではないかと思う。4は詳しくは次の項で取り上げるが、柏木の心を「思ひけり」という、語り手の立場で使う「けり」を伴う形で述べたり、或いはもっとはっきりした形で、語り手の存在を示しながら述べるものである。これは一体化表現とは言えないが、内容的には、同じく柏木の心の内奥を語っている。柏木に敬語が付かない諸例を見ると、作者は、柏木の深い心や、その心に由来する行動や状態を述べる時には敬語を付けない、という原則を持っているように思われる。5は、相手と柏木との身分の懸隔を強調するためだろう。同じように源氏と対座している時でも敬語が付く時と付かない時があるのは、前者が地位に相応しい振舞いを強調したい時であり、後者は身分の差を強調した

い時なのであろう。

b 語り手による人物の心の説明

前項で、作中人物と語り手が一体化してその心の内奥や、秘かな行動が述べられる例を見てきたのであるが、同じように人物の心の内奥が語られながら、そこにはっきり語り手の存在が感じられる文がある。例えば次のようなものである。

- 権中納言も、かかる事どもを聞き給ふに、……心ときめきもしつべけれど……もとよりすきずきしからぬ心なれば、思ひしづめつつ、うち出でねど、さすがに、ほかざまに定まりはて給はむも、いかにぞやおぼえて、耳はとまりけり。(若菜上六29)

これは女三宮降嫁にまつわる夕霧の心を述べたもので、もしや自分に、という期待が胸をよぎるところである。他の求婚者たちについては、「いかがは御心の動かざらむ」、「御気色せちに賜り給ふなるべし」と、外側から憶測しているという色合いが濃い語り口であるのに比べ、夕霧の心の中は無敬語で描かれ、読者はいかに夕霧の奥深い心を知らされる気がする。野分巻で夕霧の思惟や動作を無敬語で述べるのと同様な手法である。しかし、野分巻が現在形で述べられていたのに対し、ここでは、引用文の最後に「とまりけり」とある。この「けり」はおそらく語り手の回想を表していると思われるので、上の文は一概に語り手と作中人物が一体化しているとは言えない。このような例は他にもある。

- 宮をば……院はたびたびさやうにおもむけて、しりうごとも宣はせけるを、とねたく思へど、すこし心安き方に見え給ふ御けはひに、あなづり聞ゆとはなけれど、いとしも心は動かざりけり。(若菜下六138)

上の文は、女楽の折の記事である。夕霧の心の中が述べられているが、最後の「動かざりけり」は、この一節が語り手の説明であること示していると思われる。

このように、作中人物の奥深い心の中が、無敬語で、しかも語り手の立場から語られている文は、夕霧よりも柏木に関する話題の方に、より多くある。第二部に入って初めて柏木が本格的に紹介される文では、先に(5p)述べたとおり、「けり」によって語り手の存在が示されている。この他、柏木の恋の経緯が語られる時は、殆ど常に無敬語、且つ語り手の存在が明瞭である。

- ことわりとは思へども……と思ふにつけて、大方にては惜しくめでたしと思ひ聞ゆる院の御ため、なまゆがむ心や添ひにたらむ。(若菜下六110)
- 衛門督を、さも気色ばまばと思すべかめれど、猫には思ひおとし奉るにや、かけても思ひよらぬぞ、口惜しかりける。(若菜下六115)

- まことや、衛門督は中納言になりにきかし。……
思ふことのかなはめ憂れはしさを思ひわびて、この
宮の御姉の二の宮をなむ得奉りてける。……なほか
の下の心わすられず。小侍従といふ語らひ人は、宮
の御侍従の乳母の女なりけり。その乳母の姉ぞ、か
のかんの君の御乳母なりければ、早くよりけちかく
聞き奉りて、まだ宮をさなくおはしましし時より、
いと清らになむおはします、帝のかしづき奉り給ふ
さまなど、聞きおき奉りて、かかる思ひもつきそめ
たるなりけり。かくて院も離れおはしますほど、人
目少なくしめやかならむを推しはかりて、小侍従を
迎へとりつつ、いみじう語らふ。(若菜下六155)
- もろかづら落葉を何に拾ひけむ
名はむつまじきかざしなれども
と書きすさびるたる、いとなめげなるしりうごとな
りかし。(若菜下六165)
- かの君は胸つぶれて、かかる折りのらうらうな
らずはえ参るまじく、けはひ恥づかし思ふも、心
のうちぞ腹ぎたなかりける。(若菜下六171)
- 安からず思ふにここちもいと悩ましくて、内へも
参らず。さして重き罪にはあたるべきならねど、身
のいたづらになりぬるここちすれば、「さればよ」
と、かつはわが心も、いとつらくおぼゆ。……な
ど、今ぞ思ひあはする。しひてこの事を思ひさまさ
むと思ふ方にて、あながちに難つけ奉らまほしきに
やあらむ。(若菜下六184)

これらの文では、いずれも、他の誰もが知り得ない柏木の秘かな心の内奥や動作が無敬語で語られており、且つ語り手は、回想、推測、批判、揶揄などという形ではっきり姿を現わしている。これらは内容的にも記事の配置から言っても、a項で見た諸例と非常に近いところにあり、語り手が作中人物に一体化している、いない、という大きな違いはあるものの、作中人物の心の内奥やそれに基づいての動作を話題にしているという点で、同質のものを感ずるのである。

一体化表現は、よく「語り手は作中人物と一体化して姿が消える」と言われる。では、一体化表現と、b項に挙げた諸例とは、源氏物語の表現方法として、全く異質なのだろうか。

第一部には、一体化表現の直後に草子地がある例がいくつか見られた。

- (末摘花の) 頭つき髪のかかりはしもうつくしげに、めでたしと思ひ聞ゆる人々にも、をさをさ劣るまじう、桂の裾にたまりて、ひかれたる程、一尺ばかりあまりたらむと見ゆ。着給へる物どもをさへ言ひたつるも、物言ひさがなきやうなれど、昔物語に

も、人の御装束をこそ先づ言ひためれ。(末摘花二38)

- 色黒く鬚がちに見えて、いと心づきなし。いかでかは女のつくろひたてたる顔の色あひには似たらむ。(行幸五80)
- 「殿の(花散里を)さやうなる御かたち、御心と見給うて、浜ゆふばかりのへだてさしかくしつつ、何くれとめてなしまぎらはし給ふめるも、むべなりけり」と思ふ心のうちぞはづかしかりける。(乙女四104)
- 八重山吹の咲き乱れたるさかりに露のかかれる夕映ぞ、ふと思ひいでらるる。折にあはぬよそへどもなれど、なほうち覚ゆるやうよ。(野分五72)
- 「あやしの事どもや。むべなりけり」と、思ひ合はする事どももあるに、かのつれなき人の御有様よりも、なほもあらず思ひ出でられて、「思ひ寄らざりける事よ」と、しれじれしきここちす。されど、あるまじう、ねぢけたるべき程なりけり、と思ひ返す事こそは、あり難きまめまめしきなめれ。(行幸五94)

これら第一部の五例は、一体化表現のあと、すぐ語り手が顔を出して、語り口の弁解をしたり、作中人物の心を批評したりしている。これらを見ると、一体化表現とは「語り手が姿を消す」叙述方法では決してないことがわかる。次の三例も、人物を無敬語で叙し、且つ語り手が顔を出しているという点で、上記五例と同じであろう。

- よそよそになりては(夕霧は)これをぞ静心なく思ふべき。(乙女四80)
- (雲居雁は)あひなく御顔も引き入れ給へど、あはれは知らぬにしもあらぬぞ、惜きや。(乙女四91)
- さるは(玉鬘は)心のうちにさも思はずかし。(胡蝶四182)

前稿で、一体化表現で語っている語り手、及びその直後に姿を表している語り手とは、おそらく、玉上氏の提唱された¹⁴⁾作中人物に近侍した古御達よりもっと自由で抽象的な、むしろ「作者に近い存在」ではないかと推測を述べた。b項に挙げた第二部の諸例の語り手も、作中人物の心を無敬語で語り、且つ、説明、批評といった形で姿を現しているという点で、第一部の上記八例の語り手と同質と考えられないだろうか。第二部において、柏木や夕霧を無敬語で述べる人が多いのは、彼らが源氏に比して身分が低いから、というより、話題が彼らのことになる、語り手は光源氏の側近女房という具体的な立場を離れ、作者に近い、自由で抽象的な存在として語ることが容易だったから、と考えられないだろうか。

c 間接話法

イ)「思ふ」「言ふ」「忘る」「書く」などでうけとめられる文脈は、これらの動詞の内容を表すので、心内語や会話に準じた敬語の使い方になる。例えば次のようなものである。(~~線は、無敬語部分を承けとめる語)

- 今はさりとともとのみ、わが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人わらへならむ事を、下には思ひ続け給へど(若菜上六41)
- 取りしふみのことも思ひいで給はず。(夕霧七113)
- 昔より物を思ふことなど語りいでたまふ中に(幻七184)

次の例は、これらの変型である。

- このふみのけしきなくをこづり取らむの心にて(夕霧七112)

次のような例は、途中まではっきりした心内語。後が間接話法となって動詞にうけとめられる。

- 年頃さもやあらむと思ひし事どもも、今はとのみもて離れ給ひつつ、さらばかくこそはと、うち解け行く末に、ありありて、かく世の聞き耳もなめならぬ事の出できぬるよ。思ひ定むべき世の有様にもあらざりければ、今よりのちも後めたくぞ思しなりぬる。(若菜上六49)
- いかならむ折りに対面あらむ、今一度あひ見て、その世のことも聞えまほしくのみ思し渡るを(若菜上六57)

ロ) 心情を表す形容詞又は形容動詞によって受けとめられる文脈は、その心情の内容や対象を表すので、心内語に準じた敬語の使い方になる。例を挙げる。

- しばし心に隔て残したることあらむもいぶせきを、その夜はうちやすみて明かし給ひつ。(若菜上六39)
- 思ひつつ弱りぬる事と思ふに、口惜しければ(柏木七36)
- 「物をのみ思ほし添ふべかりける」と見奉るも、胸つとふたがりて悲しければ(夕霧七116)
- かうのみしれがましうて、出で入らむもあやしければ、今日とはまりて、心のどかにおはす。(夕霧七147)

以上は敬語が除去される例だが、その逆もある。明石入道は第二部で敬語が付く例が5つあるが、そのうち

- 世をそむきし給ひし人も恋しく、さまざまにもの悲しきを、かつはゆゆしと言忌みて(若菜下六124)

では、「恋しく」思うのは明石尼君。その心に浮かぶ入

道であるので、敬語が付く。

b 作中人物に対する評価

落葉宮の母御息所のために加持をする律師は、初めは次の如く敬語が付く。

- なほ陀羅尼読み給ふ。(夕霧七103)
- 声はかれていかり給ふ。(同)
- 問ひ申し給ふ。(同104)

が、宮と夕霧の関係を早合点し、それを非難する言葉のあとでは、

- ……と頭ふりて、ただ言ひに言ひ放てば(同105)
- 律師立ちぬるのちに(同)

と、無敬語になる。あまりに露骨で強い調子の言い方が敬語を付けるにはふさわしくないであろう。

小野山荘の落葉宮母子を訪ねた夕霧は、消息を伝える女房について御廉の中に入ってしまう、

- 宮は、いとむくつけうなり給うて、北の御障子のとにゐざりいでさせ給ふを、いとうたどりて、引きとどめ奉りつ。(夕霧七96)

という大胆な行動に出る。そして、

- (宮が)障子をおさへ給へるは、いと物はかなきかためなれど、引きもあけず、「かばかりのけちめをと、強ひて思さるむこそあはれなれ」と、うちわらひて、うたて心のままなるさまにもあらず。

(夕霧七97)

と、それ以上の行動には出ないが、この部分にも敬語は付かない、この時の夕霧の行動は、「人々(女房たち)もあきれて」とあり、決してスマートなやり方ではない。敬語が付かないのは、語り手が夕霧の行動をからかっている、或いは非難しているからではなからうか。

明石御方は、第二部では敬語が付くのが普通であり、敬語が付かないのは何らかの理由がある場合である。次の例は、「目くはす」という動作が、上流婦人にふさわしくなく、作者に敬語をつけることをためらわせたのではなからうか。

- 「あなたはいらいた」と目くはすれど、(尼君は)聞きも入れず。(若菜上六79)

「目くはす」は源氏物語に、他に三例ある。

- (大貳の乳母の)子どもは、いと見苦しと思ひて「そむきぬる世の去りがたきやうに、みづからひそみ御覽ぜられ給ふ」と、つきじろひ目くはす。

(夕霧一107)

- 中務、中将の君などやうの人々目をくはせつつ、「余りなる御思ひやりかな」などいふべし。(若菜上六50)

- (蔵人少将の詞)「……めくはせ奉らましかば、こよなからましものを」(竹河八73)

夕顔巻、若菜上巻の例は、乳母の子ども、女房たちの動作である。竹河巻は成立について疑義があり、言葉の使用も無神経などところがある巻なので考慮の外に置くこととする。先の二巻の例から考えると、「目くはす」という動作は、女房階級のものであり、第二部の明石御方にはふさわしくなく、敬語を付けなかったのであろう。第一部で、空蟬の、小君に対する動作には敬語が付くの、に、「言ひおどす」「言ひはなつ」には敬語が付かないことと同じ現象であろう。

明石入道は、第一部では全く敬語が付かず、語り手から擲論されてさえた。が、第二部では先に挙げた例(10p)の他、四個所に敬語が付く。

- 思ひ離る世のとぢめに文書きて、御方に奉れ給へり。(若菜上六83)
- さてかの社にたて集めたる願文どもを大きな沈の文箱にふんじこめて奉り給へり。(若菜上六85)
- この文の言葉いとうたてこはく、憎げなる様を、陸奥紙にて、年経にければ、黄ばみ厚肥えたる五六枚、さすがに香にいと深くしみたるに書き給へり。(若菜上六91)

この三文は、入山する際に明石御方に送った手紙と願文に関するものであり、この行為を語り手が高く評価して敬語を付けたのだと思う。

次の文は、語り手がユーモアをこめて敬語を使い分けたのであろう。

- かかる御有様をも、かの入道の、聞かず見ぬよにかけはなれ給へるのみなむ飽かざりける。難き事なりかし。交らはましも見苦しくや。(若菜下六126)
- 「かかる～なりかし」で、入山したことを敬語付きで賞賛し、「交らはまし」の文で、「でもここにいたらさぞ見苦しいでしょうね」と、敬語なしでけなすのである。明石入道は第二部でもやはり語り手からからかわれている。

e 身分差

朱雀院のもとに夕霧が伺候するところは、二人の心理が一体化表現で語られることを先に述べたが、この段落の最後に、

- とばかり奏して止みぬ。(若菜上六20)
- とあるのは、一体化表現のためではなく、朱雀院と夕霧の身分の差を考慮して語り手が夕霧に敬語を付けなかったのであろう。

明石御方は、第二部では敬語が付くのが普通である。源氏と共にいる場面でもそれは変わらない。明石女御の出産後、源氏をたしなめる場面など、明石御方が誠に堂々と感じられるのは、その言葉の正当さと共に、「隠れ給へり」、「(源氏が明石御方に)聞え給へば」、「聞え給

ふ」、「ものし給ふ」、「おはする」のような、敬語のふんだんな使用に原因があるのかもしれない、御法巻で、紫上の病床に源氏、明石中宮と共に集う時でも「明石御方も渡り給ひて」と敬語がつく。ところが紫上の死後になると、源氏と共に居る場面では、次の如く、敬語がつかない。これは、源氏との身分差のためと思われる。

- おぼえなき折りなれば、うちおどろかるれど、さまようけはひ心にくくもてつけて(幻七182)
- 思したるさまの心苦しきを、いとほしう見奉りて(幻七183)
- 帰り給ふを、女もものあはれに思ふべし。(幻七184)

ここで描かれる明石御方は、中宮の実母としての姿ではない。一人の女として描かれる時、源氏の傍らでは敬語が付かないという、他の女君とは異なる御方の限界が注目される。源氏が自室に帰ると

- つとめて(源氏が明石御方に)御文奉り給ふに(幻七185)
- いとかく、あらぬさまに思しほれたる御けしきの心苦しさに、身の上はさしおかれて、涙ぐまれ給ふ。(幻七185)

の如く、敬語が付く。

f 慣用によるもの

第一部と同様、慣用によって敬語が省かれていると思われるものがある。

- イ) 消息文に関して敬語が省かれることがある。

- ただ心をのべて
背く世の後めたくはさがりがたき絆をしひて
かけな離れそ
などやうにぞあめりし。(若菜上六56)
- 「……その夕より、乱り心地かきくらし、あやなく今日はながめ暮らし侍る」など書いて
よそに見て折らぬなげきは茂れども
名残り恋しき花の夕かげ(若菜上六108)

これらは「のべてあって」、「書いてあって」など、文の状態を表すのだらう。

- ロ) 歌の前の動作は、敬語が省略されることがある。

- 立ち止まりて「さも心憂き御心かな。
松島のあまのぬれぎぬなれぬとて
ぬぎかへつてふ名をたためやは」(夕霧七144)

- ハ) 「さま」「やう」に続く場合。

- つゆも見知らぬやうに、いと気配をかしく物語りなどし給ひつつ、夜更くるまでおはす。(若菜上六49)
- わざとも見入れぬさまに山のかたを眺めて、「なほなほ」とせちに宣へば(夕霧七126)

二)「べし」に続く場合。

- 年ごろ目慣れ給へる人のおぼろけならむが、いとかくおどろかるべきにもあらぬを、なほ類なくこそは、と見給ふ。(若菜上六66)

ホ)成句、又は古歌の引用によると思われるもの

- もの思ふ宿は、よろづの事につけて、静かに心細う、暮らしかね給ふに(柏木七53)

「もの思ふ宿」の句は、古今集、秋、よみ人しらずの
鳴き渡る雁の涙や落ちつらむ物思ふ宿の萩の上の露
の他に、後撰集、秋220、よみ人しらず

いとどしく物思ふ宿の萩の葉に秋をつける風のわびし

さがあり、私家集にも二、三見える。「もの思ふ宿」は成句となっていたと考えられる。

- 臥しても起きても涙のひる世なく、霧りふたがりて明かし暮らし給ふ。(御法七169)

「臥しても起きても」は一種の成句であろう。

三. 結 び

第二部で最も敬語が除去されることの多いのは、柏木、次いで夕霧である。彼らの秘かな心の中——柏木の場合は女三宮への思慕と、それ故の煩悶。夕霧の場合は女三宮・柏木事件の一連の観察、及び紫上への思慕など——や、その心に基く動作が語られる時は、敬語が付かない。これは、語り手が作中人物に一体化して、恰も語り手が彼らの心や動作を体験しているかのように語る表現法のためであろう。この一体化表現による敬語の除去は、第一部と同様、第二部においても、例外的に敬語が取捨される最も大きな原因である。

第二部では、一体化表現と同じく柏木や夕霧の深い心の中を語りながら、それが語り手の立場からの説明や批評であることが明らかな例がよくあり、これも敬語が例外的に除去される原因として、大きなものである。語り手の存在が示されているので、語り手が作中人物と一体化しているとは言えないが、第一部のいくつかの例で見るとおり、一体化表現とは決して「語り手が姿を消す」表現ではないことを考えると、柏木や夕霧の心は無敬語で説明したり批評したりするのは、一体化表現と次元を同じくする語り手、即ち、側近女房という具体的な像を持つ語り手ではなく、もっと自由で抽象的な、「作者に近い語り手」であると考えられまいだろうか。

柏木、夕霧に比べ、源氏の場合は敬語が除去されることは少ない。源氏の心の中が心内語の形で語られることはあるものの、第二部で作者が内面の奥深いところを読者に知らせようとしているのは、やはり柏木と夕霧なのであろう。ところが、正編終末に当たる御法巻、幻巻において、紫上を思うところに源氏の立場に立つ一体化表

現がよく使われる。第一部の前半の巻々で、藤壺及び少女期の紫上を思うところに一体化表現が使われていたのと相応ずる現象であり、源氏の心情は、少女から亡き人へと変わってしまったものの紫上を思うという点で、若き日に戻っている。

一体化表現がよく使われる作中人物とは、作者が最も深く強くその心情を読者に伝えたい人物であろう。第二部では、柏木、次いで夕霧がその人物に当たるわけだが、終末の二巻では源氏が若い二人に取って代わっている。一体化表現による敬語の例外的除去という現象から見て、御法、幻巻は、正編の締め括りにふさわしい二巻に思える。

(以上)

注

- 1) 拙稿「源氏物語における敬語の例外的取捨と語り手」『十文字学園女子短期大学研究紀要16』(1984)
- 2) 「敬語の文学的考察」(『源氏物語研究』所収)
- 3) 『全釈源氏物語』
- 4) 島津久基著『日本文学考論』
- 5) 西尾光雄著『日本文学史・中古』
- 6) 「物語の言語行為」(『国語国文』昭和60年3月)
- 7) 「現時点における注釈の問題」(『源氏物語をどう読むか』国文学解釈と鑑賞別冊 昭和61年4月)
- 8) 「源氏物語の読者」(『源氏物語研究』所収)
- 9) 家井美千子氏「右衛門督——『源氏物語』における——」(『中古文学』36号 昭和61年3月)による。
- 10) 「源氏物語の表現構造としての敬語法——場面空間・表現空間の造型性——」(『学大国文』昭和60年3月)
- 11) 日本古典文学全集『源氏物語4』128P
他に池田和臣氏も「源氏物語の草子地についての一視角」(『中古文学』18号 昭和51年9月)で「語り手の評とも詠嘆ともとれる」と述べておられる。
- 12) 注2に同じ。
- 13) 武原弘『源氏物語論』231～232P
- 14) 注8に同じ。

付1

本文に引用しなかった、一体化表現のために敬語が例外的に取捨されたと思われる例を次に掲げる。

- 「……いといとほしく心劣りし給ふらむ」と覚ゆ。(若菜上六79)
- ただ、かのたえ籠りにたる山住みを思ひやるのみぞ、あはれにおぼつかなき。(若菜上六97)
- 何事もただおいらかに、うちおほきたるさまして

子どもあつかひをいとまなくつきつぎし給へば、をか
しき所もなく覚ゆ。(若菜下六145)

- 限りありて別れはて給はむよりは、目の前にわが心
とやつし捨て給はむ御有様を見ては、さらに片時たふ
まじくのみ、惜しく悲しかるべければ(若菜下六153)
- さき花やかに追ふ音して、ここに止まりぬる人あ
り。(柏木七47)
- 頭はつゆ草してことさらに色どりたらむこちし
て、口つきうつくしうにほひ、まみのびらかに、はづ
かしう薫りたるなどは、なほいとよく思ひいでるれ
ど(横笛七60)
- それにつけてもいといぶかしう覚ゆ。(横笛七67)
- 「よべだに、いかに思ひ明かし給うけむ。けふも今
までふみをだに」と、いはむかたなく覚ゆ。(夕霧七
115)
- 御髪かきなでつくろひ、おろし奉り給ひしを思ひい
づるに、目もきりていみじ。(夕霧七136)
- ましてかういみじうおとろへにたる有様を、しばし
にても見しのびなむや、と思ふも、いみじう恥づか
し。(夕霧七148)

柏木に関しては次のとおりである。

- みづからも大殿を見奉るに、気恐しくまばゆく、…
…思ひわびては……と思ふに、物狂ほしく、「いかで
かは盗みいでむ」と、それさへぞ難きことなりける。
(若菜下六111)
- ……さすがにうち覚ゆれど、おぼろけにしめたる我
が心から、浅くも思ひなされず。(若菜下六112)
- うちかしまりたる気色見せて、ゆかの下にいだき
おろし奉るに……と言ひもてゆくに……と思ふほど
に、おどろきて、いかに見えつるならむと思ふ。……
聞えいでたり。……いとかたじけなくあはれと見奉り
て、人の御涙をさへのごふ袖は、いとど露けさのみま
さる。明けゆくけしきなるに、いでむ方なくなかなか
なり。……よろずに聞えなやますも、うるさくわびし
くて、……いとうしと思ひ聞えて……かき抱きて出づ
るに……戸を押しあげたれば、渡殿の南の戸の、よべ
入りしがまだあきながらあるに、まだ明けぐれのほど
なるべし。ほのかに見奉らむの心あれば、格子をやを
ら引きあげて……おどし聞ゆるを……いと若々しき御
さまなり。……のどかならず立ち出づる明けぐれ、秋
の空よりも心づくしなり。

おきてゆく空も知られぬあげぐれに

いづくの露のかかる袖なり

とひきいでてうれへ聞ゆれば、いでなむとするに少し
慰め給ひて

あげぐれの空にうき身は消えなむ

夢なりけりと見てもやむべく

とはかなげに宣ふ声の、若くをかしげなるを聞きさす
やうにて出でぬる、魂は、まことに身をはなれてとま
りぬるここちす。(若菜下七159~163)

- うちふしたれど目も合はず、見つる夢のさだかにあ
はむ事もかたきをさへ思ふに、かの猫のありしさま、
いと恋しく思ひいでる。……女の御ためはさらにも
いはず、わがこちにもいとあるまじき事といふ中に
も、むくつけくおぼゆれば、思ひのままにもえ紛れあ
りかず。……いと恐ろしく恥づかしく覚ゆ。(若菜下
六163)
- 「……さりとしてかきたえ、ほのめき参らざらむも人
目あやしく、かの御心にも思し合はせむ事のいみじ
さ」など、安からず思ふに、こちもいと悩ましく
て、内へも参らず。さして重き罪にはあたるべきなら
ねど、身のいたづらになりぬるこちすれば、「され
ばよ」と、かつはわが心も、いとつらくおぼゆ。(若
菜下六185)
- 顔の色たがふらむと覚えて、御答もとみにえ聞え
ず。(若菜下六196)

付 2

なぜ敬語が例外的に取捨されているか不明なものを次
に掲げる。

- 御方の御心掟のらうらうじく気高く、おほどかなる
ものの、さるべき方には卑下して、憎らかにもうけば
らぬなどを賞めぬ人なし。(若菜上六82)
- (明石御方が源氏に) 聞ゆれば (若菜上六93)
- ……語らひ契る。……と答へて、煩はしければ、こ
とに言はせずなりぬ。こと事に言ひ紛らはして、各々
別れぬ。(若菜上六106)
- あざやかに気高きものから、なつかしうなまめいた
り。(柏木七48)
- 「右將軍が塚に草初めて青し」とうち口ずさびて
(柏木七55)
- 目をおしすりて紛らはし給へるさま、をかしかれ
ば、ほほゑみながら涙はおちぬ。(御法七162)

柏木について、8 P に述べた原則にはまりきらないも
のは、次の諸例である。

- 女御の御方に参りて、物語りなど聞え紛らはしこ
ろみる。(若菜下六112)
- 小侍従を迎へとりつつ、いみじう語らふ。(若菜下
六155)
- かの人もいみじげにのみ言ひわたれども、小侍従も
わづらはしく思ひ嘆きて(若菜下六183)